

高齢者における作業情意尺度とPGSの比較について

医療法人愛広会 豊浦病院
雨尾 くるみ

1 背景

高齢期障害者を対象に用いられる評価として、認知的側面は、Mini Mental State (以下MMS) で測定され、さらに行動と認知面からの評価スケールとしては、パラチェック老人行動評定尺度 (以下 PGS) を施行されることが多い。これらの評価は、生活機能とその障害について測定しており、活動参加に影響を及ぼす背景因子の一つである個人的因子の、作業に対する個人の情意反応の影響は考慮されていない。

2 目的

今回、個人的因子の一つである情意を作業情意尺度とし、生活機能と情意との関係について検討を試みた。生活機能としてPGSの各評価項目を使用し、作業情意尺度の段階との関連性について検討した。さらにPGS各項目と認知機能評価であるMMSとの関連についても検討した。

3 方法

対象者：療養病棟に入院中の17名、対象者の特性 性別 男4名、女13名。平均年齢 82.9歳(S.D 6.28)。平均MMS得点 17.3点(S.D 7.19)。測定期間 平成19年4月3日～平成19年5月12日とした。

評価項目は、MMS、PGSの合計点およびPGSの各項目である「A. 移動/B. 視覚/C. 聴覚/D. 排泄/E. 食事/F. 入浴/G. 整容/H. 病棟作業の手伝い/I. 個人的な反応/J. 集団的行動」、そして、そのそれぞれについての作業情意尺度として以下の「5. 楽しんで行っている状態/4. 平静で落ち着いた状態/3. 困難を感じながらも何とかやり遂げようとしている状態/2. 仕方なく行っている状態/1. 明らかに不快感を表し拒絶的な状態」の5段階を用いて点数化して評価した。

4 結果

1) PGS合計点およびPGSにおける各項目と作業情意尺度の点数の比較

PGSにおける視覚(新聞やテレビを見たりする状態)の点数と、作業情意尺度の点数に相関があることが分かった($\rho=0.499$, $p=0.042$)。また、聴覚(会話などの状態)と作業情意尺度との関係においても正の相関が見られた($\rho=0.869$, $p<0.000$)。さらに、排泄のコントロールが出来ることと情意レベルがよいことも正の相関がある($\rho=0.500$, $p=0.041$)。また、病棟作業の手伝いの実施状況と情意のレベルも正の相関が認められた($\rho=0.775$, $p<0.000$)。個人反応(他者との

会話や職員と親しい関係が保てること)と作業情意尺度も正の相関を示している($\rho=0.606$, $p=0.010$)。集団行動(集団の中で自由な発言が可能な状態)と情意も正の相関を示した($\rho=0.839$, $p<0.000$)。また、総合的な状態としての合計点と情意にも正の相関が認められた($\rho=0.610$, $p=0.009$)。特に、作業情意(反応)との比較で、相関係数0.7以上の強い正の相関が認められたのは、聴覚・病棟作業の手伝い・集団行動のPGSの各項目およびPGSの合計点であった。

2) PGSの各項目の点数とMMSの比較

PGSの食事(自分で食べられること)とMMSの得点に相関が認められた($\rho=0.547$, $p=0.028$)。さらに整容(忘れないで自分で身なりを整えられること)とMMSの得点とも相関がみられた($\rho=0.669$, $p=0.005$)。また、PGSの合計点とMMSの得点の間にも正の相関があった($\rho=0.505$, $p=0.046$)。

5 考察

PGSの各項目とそれを遂行しているときの情意尺度で強く相関が見られたのは、聴覚(会話)・病棟の手伝い・集団行動である。これらは、対人関係を必要とする行動であり、情意との結びつきが強いことが予測される。これらの項目の活動を活性化することにより、情意に影響することが推測される。

食事や整容は、MMSで評価した認知には強い関係性を示したが、これらは基本的なADLの項目であり、心身機能に依存するところが大きい。

6 結論

聴覚を伴った作業、または集団や対人関係を要する作業の遂行度が高いことと、情意の段階が上昇している(快の情意へ向かうこと)ことは、正の相関関係があると言える。逆にこれらの作業の遂行度が低いと不快な、良くない情意反応との相関が見受けられる。これらの要素のかかわりがある集団的なコミュニケーション活動の重要性が伺える。

参考文献

山下ら：情意の臨床の意義について、「作業療法」, Vol11.4, 特59号:250, 1995.